

令和2年度 霞ヶ浦学講座第6講「霞ヶ浦湖岸域とジオパーク」実施報告

実施日時：令和2年9月27日（日）13:30-15:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：久田健一郎 氏（元筑波大学教授） 参加者数：30名

テーマ：「霞ヶ浦湖岸域とジオパーク ー砂鉄と霞ヶ浦ー」

概要

【筑波山地域ジオパーク】

ジオパークの「ジオ」は「地球・大地」という意味があり、ジオパークは「大地の公園」ともいわれています。日本ジオパークは日本ジオパーク委員会より43地域が認定されています（2020年4月現在）。筑波山地域ジオパークは平成28年9月に認定されました。筑波山・霞ヶ浦・関東平野を含んでいます。つくば市、石岡市、笠間市、桜川市、土浦市、かすみがうら市の6市からなる筑波山地域ジオパーク推進協議会がジオパーク活動を進めています。

筑波山地域ジオパークでは、テーマを「関東平野に抱かれた山と湖～自然と人をつなぐ石・土・水」とし、大きく「筑波・鶏足山塊ゾーン」、「霞ヶ浦ゾーン」、「山と湖をつなぐ平野ゾーン」の3つのゾーンに分けています。そして見どころを7つのジオストーリーと26のジオサイトを使って説明しています。

ジオストーリーでは、霞ヶ浦湖岸域付近は「古東京湾や古鬼怒川が作り出した霞ヶ浦」として説明しています。そして、「土浦」、「沖宿」、「崎浜・川尻」、「歩崎」、「高浜、石岡」のジオサイトがあります。

【ジオストーリー】

ジオパークの基本理念は、土台として「地形・地質」があり、その上に、「生物・生態系」があり、頂点に「歴史、文化・産業」があります。この土台の「地形・地質」と「歴史・文化・産業」をより有機的に関連づけることはジオパークを知る、説明するうえでも重要になってきます。

【ジオストーリー例 砂鉄と霞ヶ浦】

旧出島村（現かすみがうら市）には、多くの古代製鉄址がみられ、鹿の子c遺跡（石岡市）からは工房跡が見いだされ、工房では製鉄の一部は砂鉄を利用されたといわれています。また、外房から常磐にかけての海浜は、「日本三大砂鉄濃集海浜」の一つと捉えることができます。

この砂鉄はどこから来たのかを考えてみると、それはジオストーリー的考察になります。霞ヶ浦湖岸には、砂鉄の堆積層がみられます。霞ヶ浦は平均水深が浅いため、強風の折に、湖底の堆積物は攪拌を受け、砂鉄層ができやすいと考えられます。

また、砂鉄は鉱物学的には磁鉄鉱でマグマ起源と考えられます。では、その磁鉄鉱はどこにあったのか？どこからきたのでしょうか？

起源として関東ローム層、筑波山塊の花崗岩（深成岩）、日光連山の火山岩が考えられます。筑波山の花崗岩はチタン系鉄鉱の花崗岩になりますので、主に日光連山から（約2万年前

まで流れていた) 古鬼怒川を通して運ばれたと考えられます。旧鬼怒川の河道近くの尾崎前山遺跡(八千代町)でも製鉄址がみられます。

霞ヶ浦は、地形、地質的に、砂鉄を濃集することができました。石岡には国府がおかれたこともあり、砂鉄が古代の政治・文化に影響を与えたと考えることができます。このような「ジオストーリー的」考察を行うことで地域資源をとらえることは、霞ヶ浦を理解するうえでも、地域を学習するうえでも楽しく、重要であると考えます。

詳細はPDF資料をご覧ください。(文責 小川)

